

## 「十一月という月」

主任司祭 吉池 好高

11月は、教会の典礼暦を生きる私たちにとって特別な季節です。今年は11月21日にあたる「王であるキリストの主日」をもって、典礼暦はこの一年を締めくくります。キリストが王であるということは、イエス・キリストこそ、私たちの「メシア」であり「救い主」であるということです。典礼暦の一年の最終主日を「王であるキリスト」の主日として祝うということは、この世の時の流れ中で私たちが信じている、「イエス・キリストこそ私たちのメシア・救い主」であることが、この世の時の流れの果てに、神の大いなる光の中で、一点の曇りもなく示されることへの信仰に基づく希望を表明するということです。私たちにこのような希望を与えてくださった、その希望の中心に立っておられる私たちのメシア・王であるキリストへの賛美を感謝のうちに、めぐり行く私たちの時はその終末を迎えるのです。

典礼暦のこの季節の11月を教会は死者の月と定め、この世の務めを終えて、死の彼方に旅立って行った人々のために祈ります。死の彼方に何が私たちを待っているか、この世の生を生きる私たちは誰も、自分の経験によっては知ることは出来ません。それゆえ、「死」を想うとき、私たちは自分が生きるいのちが神秘に包まれていることを悟ります。私たちのもとから旅立って行った死者たちを想うことは、私たちが生きているいのちの神秘を思い出させてくれます。日常の営みの足を止めて、死者を想い、私たちのいのちの神秘と向かいあうとき、私たちは自分が信じている信仰が、私たちに何をもたらすかを知るのです。そしてそれは、「王であるキリスト」の主日をもって締めくくられる教会の典礼が私たちに思い起こさせる、信じる者に約束されている確かな希望の世界です。

死者の月の初めに、教会は諸聖人の祭日を祝います。この祭日に祝われることこそ、私たちのいのちの神秘の彼方に開かれた、全てのいのちの最終的な姿です。この希望を新たにして、私たちは死者のたちのために祈ります。私たちのもとを旅立った死者たちが、全ての者の王・メシアの永遠の宴に与れるよう祈るのです。